

ID	受理日	番号	報告者名	一般名	生物由来成分名	原材料名	原産国	含有区分	文献	症例	適正 使用 措置	感染症(PT)	出典	概要
												ヒトポリオマ ウイルス感染	J Virol 2007; 81: 4130-4136	ヒトの尿道からの検体をウイルススクリーニングし、Kポリ オーマウイルスと暫定的に名付けた未知のポリオーマウ イルスを同定した。このウイルスは、遺伝子のearly領域で は、他の霊長類のポリオーマウイルスに系統遺伝学的的に 近縁であるが、late領域では、既知のポリオーマウイルス に対して相同性が低い(アミノ酸同一性30%未満)。この ウイルスは、PCRによって、鼻咽頭吸引物637例中6例 (1%)と便検体192例中1例(0.5%)で検出されたが、尿及び 血液検体では検出されなかった。
												異型クロイツ フェルト・ヤコ ブ病	PLoS Pathogens 2007; 3: 659-667	経口的又は非経口的にスクレイピーを投与したハムス ターの皮膚にPrPScが沈着するかを調べた。経口投与し たハムスターでは発症前にPrPScが検出され、発症時に はPrPScの蓄積がみられた。PrPScは皮膚の角化細胞で はなく神経線維に局在し、皮膚におけるPrPScの沈着は 感染経路やリンパ組織感染に依存しなかった。神経が介 在する遠心的な皮膚へのプリオン拡大が示された。更 に、スクレイピーに自然感染したヒツジを調べたところ、5 頭中2頭の皮膚検体中にPrPScが検出された。
												異型クロイツ フェルト・ヤコ ブ病	FDA/CBER 2006年 11月7日	英国血漿由来の第XI因子製剤が、1989-2000年に米国で 50名以下の患者に使用されたと推定される。モデルを用 いたリスク評価の結果、1998年まで第XI因子製剤を製造 するために使用された血漿プールの1.6%~50%がvCJD病 原体を含んでいる可能性があった。しかし、これまで血漿 由来製剤の投与を受けた患者において、世界中で一件も vCJDの症例は報告されていない。製造工程における vCJD除去、使用量、曝露経路および英国ドナーのvCJD 有病率がリスクに影響を与える重要な因子である。
												デング熱	Trans R Soc Trop Med Hyg 2007; 101: 738-739	日本人のデング熱患者(28歳、女性)の血漿サンプル中 ではなく尿及び唾液中でデングウイルスを検出することに 成功した。発症後7、14および25日目の血漿検体中で抗 デングウイルス抗体は同定されたが、デングウイルス遺 伝子は検出されなかった。発症後7、8および14日目の 尿、ならびに7日目の唾液からデングウイルス1型遺伝子 が検出された。現在の研究の結果は、尿及び唾液中のデ ングウイルス遺伝子の検出が有効な診断方法、特にウイ ルス性出血の子供の診断方法になりうることを示唆して いる。
405	2007/08/24	70405	ベネシス	人血清アルブミン 乾燥濃縮人アンチロネンⅢ 人ハプトグロビン 乾燥濃縮人血液凝固第Ⅳ因子	ヘパリン	ブタ小腸粘膜	中国	製造工程	無	無	無			